妹尾写真館

～帰らぬ人との最後の一枚、お撮りします～

水瀬さら Sara Minase

アルファポリス文庫

https://www.alphapolis.co.jp/

目次

contents

第一章 最後の記念写真 …… P005
第二章 最後の笑顔 …… P047
第三章 最後のメロディー …… P099
第四章 最後のキャッチボール …… P135
第五章 最後の告白 …… P177
第六章 最後の思い出 …… P217
第七章 最後の一皿 …… P263
最終章 初めての贈り物 …… P309

第一章

最後の記念写真

SENOO PHOTO STUDIO

Minase Sara Presents

丘の上に吹く冷たい風が、黒いスカートの裾を揺らす。
ゆっくり顔を上げると、煙突から空に昇っていく一筋の煙が見えた。
枯れ木がざわっと音を立てる。少し体を震わせて、私は静かにまぶたを閉じる。
祖父が逝ってしまった。二十年以上、たったひとりで私を育ててくれた祖父が。
それなのに一滴の涙もこぼさない私は、どこまで薄情な孫娘なのだろう。

＊

「急なことで、驚いたでしょう？　つむぎちゃん」
喪服姿の叔母が軽自動車を運転しながら、疲れたような声を漏らす。
私の母の妹である、この叔母に会うのは何年振りだろう。記憶の中の叔母よりも、ずいぶん白髪が増えた気がする。

祖父が倒れたと、病院から連絡が来たのは三日前。それまでは風邪ひとつひいたことのない、元気な祖父だった。

私は都内のアパートから、急いでこの海辺の町へ戻ってきたけれど、祖父はすでに帰らぬ人となっていた。

幼いころに両親を亡くし、親代わりであった祖父の最期を、私は看取ることができなかったのだ。

ほとんど親族のいない祖父の葬儀は、こぢんまりと執り行われ、気づけば祖父は骨となり小さな箱の中に納まってしまった。

本当にあっけない、祖父との別れだった。

「しばらくはこっちにいられるのよね？」

隣から聞こえた叔母の声に、私ははっと我に返る。

「はい。ちょうど仕事を退職して、転職先を探そうと思っていたところだったので」

「ひとりで大丈夫？　やっぱりうちに泊まればいいのに」

「大丈夫です。あの家がどうなっているか気になるし、きっとおじいちゃんも店のことを心配していると思うんです」

叔母がふっと息をはき、口元をゆるめる。

「そうね。最後の最後まで、お店に立っていたっていうからね。おじいちゃんも早くお店に帰りたいでしょう」

祖父はこの町でたった一軒の、小さな写真館を営んでいた。そして祖父が倒れたのも、その写真館の中だったそうだ。

車がハザードランプをつけて、道路の端に停車する。叔母が助手席に座る私を見た。

「本当にここまでいいの？」

「はい。久しぶりに、歩いて帰ってみたいんです」

「気を落とさないでね、つむぎちゃん。なにかあったらすぐ、叔母さんに連絡するのよ？」

「ありがとうございます」

祖父の骨箱を抱えて車から降り、軽自動車が走り去るのを見送ると、私は小さく息をつく。

右手を後ろに回し、ひとつに結んでいた髪をほどいた。夕暮れの冷たい風が吹いて、肩にかかる髪が揺れる。

やがて私の耳に、懐かしい音が聞こえてきた。町のスピーカーから放送される、夕刻のメロディーだ。子どものころはこのメロディーが流れると、どこで遊んでいても慌てて家に帰ったものだ。

「おじいちゃん……」

私はぽつりとつぶやく。

「家に……帰ろうか」

あたりは少しずつ、闇に包まれはじめていた。

叔母に車を停めてもらったバス通りを曲がり、急な坂道を下ると、目の前に寒々しい灰色の海が広がっていた。私にとっては見慣れた、つまらない景色だ。地方の大学を卒業するまで、私はここで育った。

低い堤防が、狭い道に沿ってゆるやかなカーブを描き、防波堤の向こうには小さな漁港が見える。その海沿いの集落に建っているのが、祖父の写真館兼自宅だ。

デジタルカメラやスマートフォンで手軽に綺麗（きれい）な写真が撮れる今の時代、個人で経営している昔ながらの写真館はだいぶ姿を消してしまった。けれど以前は、人生の節目の記念写真を撮るためや、フィルムの現像や焼き増しなどを頼むため、多くの人々が写真館を訪れていた。祖父の写真館もそうだった。

店にはいまでも、祖父の愛したモノクロ写真がたくさん並んでいる。店で撮影をしてくれたお客さんたちの許可を得て、飾らせてもらったのだ。どれも祖父が心を込めて撮影をし、丁寧に焼きつけた写真たちである。

私も一歳を迎えた年から毎年誕生日に写真を撮っては、店の壁に飾ってもらっていた。だけど大学に通いはじめたころから祖父と意見が合わなくなり、都内に就職すると同時に町を出た。私は祖父を見捨て、この寂（さび）れた町の寂れた写真館に置き去りにしたのだ。祖父に撮ってもらった私の最後の写真は、成人式の晴れ着姿だった。

ふうっと息をはき、前を向く。海を眺めるように並ぶ民家や小さな商店の中、祖父の写真館が見えてくる。木造二階建ての、レトロな雰囲気が漂う洋風の建物。周りの家からはちょっと浮いていたが、代々受け継がれているというこの古い建物が、私は内心気に入っていた。

けれどふとそこで、私は足を止めた。

あたりはもう薄暗い。街灯の灯りや民家の灯りが、ぽつぽつと灯りはじめている。

そして祖父の写真館にも、ぼんやりとオレンジ色の灯りが灯っているのだ。

「……どうして？」

あの店には、誰もいないはず。

私の両親は私が二歳のとき同時に事故で亡くなったため、父と母は写真の中の人物でしかなかった。私はずっと、祖父とふたりだけで暮らしてきたのだ。

もしかして祖父が病院に運ばれたときから、電気が灯ったままだったのだろうか。

祖父は店で倒れ、たまたま立ち寄った近所の人が救急車を呼んでくれた。そのあと叔母が戸締(とじま)りに来てくれたはずなのだが。

私は軽く深呼吸をし、祖父の骨箱を抱え直すと、灯りの灯る店に向かって歩きはじめた。

『妹尾(せのお)写真館』と書かれた店の前で立ち止まる。古いガラス戸は開いていて、店の中が丸見えだった。

まさか泥棒でも入ったのだろうか。

私はおそるおそる中をのぞき込む。重厚でアンティークな木製カウンター。ステンドグラスの飾り窓。クリーム色の壁に並んだたくさんの写真。奥にはフィルムを現像する暗室があり、店から階段をのぼった二階には、写真撮影をするスタジオがある。

祖父はこの店を、ひとりで営んでいた。フィルムカメラを使う人がほとんどいなくなり、現像やプリントの依頼が減っても。記念日の写真を撮りに、スタジオを訪れる家族が減っても。祖父は頑(かたく)なにこの『町の写真館』というスタイルを貫き通した。私のアドバイスなど聞こうともしないで。

「いらっしゃいませ」

突然、私に声がかかった。やわらかい男の人の声。店先に立っていた私は、驚いて声の方

向へ顔を向ける。

店のカウンターの向こう側に、いつのまにか見知らぬ人が立っていた。

清潔感のある黒髪で、背がすらっと高く、中性的な顔立ちをした三十歳くらいの男性だった。

「あ、あの……」

私は思わず後ずさりをしてしまった。店の外へ出て、もう一度看板を確認する。

『妹尾写真館』

二十年以上暮らした自分の家を、間違えるはずはない。

だったらこの人は……いったい誰なの？

「すみません。お客様と、間違えてしまいました」

気づくと男の人が、私の目の前に出てきてそう言った。ブラウンのシャツに細身の黒いパンツを穿(はい)いて、姿勢よく立っている。

私が戸惑っていると、その人は祖父の骨箱に目を向け静かに口を開いた。

「あなたが妹尾さんのお孫さんの、つむぎさんですね」

知らない人の口から出た自分の名前に、私はさらに驚き、体を硬くする。

そんな私を見て、男の人が穏やかな表情で微笑(ほほえ)んだ。

「はじめまして。僕はここで働かせてもらっている、天海咲耶（あまみさくや）と申します」
「天海……さん？」
「はい。二年ほど前から住み込みで、妹尾さんに仕事を教えてもらっていました」
「祖父に仕事を……」
二年前といえば、私がこの家を出て行ったあとだ。祖父とはほとんど連絡を取っていなかったから、私が知らない間に人を雇っていたのだろうか。
だけどこの家の戸締りに来たはずの叔母は、従業員がいるなど一言も言っていなかった。叔母が来たとき、この人に会わなかったのか？
私は半信半疑で、目の前の天海と名乗った人の顔を見る。叔母が言っていた「なにかあったらすぐ、叔母さんに連絡するのよ？」という言葉が頭をよぎり、スマートフォンを取り出そうかと迷う。
「もしかして警戒されていますか？　そうですよね。つむぎさんにお会いするのは、はじめてですし」
そう言うと天海さんは、少し困ったような笑みを見せ、壁際に目を向けた。
「でも僕はつむぎさんに、はじめて会った気がまったくしないんです」
店の壁には、幼いころから毎年撮影していた私の写真が飾られていた。

椅子につかまり立ちしている一歳のころの写真から、髪をふたつに結んでぬいぐるみを抱いた幼いころ。小学生になると姿勢をまっすぐ伸ばし、ちょっと澄（す）ましたような笑顔をカメラに向けている。
私は急に恥ずかしくなって、うつむいてしまった。
本当に二年前から働いていたのならば、私はこの人のことをまったく知らなかったというのに、彼は二年間もずっと、私の写真を見ていたことになる。
すると天海さんの手がゆっくりと動き、私の持っている祖父の骨箱にそっと触れた。
「妹尾さん……こんなに小さくなってしまって……」
その先は、声になっていなかった。ふっと力の抜けた私の手から、天海さんが骨箱を受け取る。そして大事そうにそれを胸に抱き、祈るように目を閉じた。
淡いオレンジ色の灯りの下、その顔はとても儚（はかな）げで美しく見えた。
「妹尾さんはいつも、つむぎさんの話をされていました。『あの子は見た目がほわっとしているけれど、見かけによらずしっかり者の、自慢の孫なんだ』と」
静かな店内に、やわらかな声が響く。けれど私は居たたまれなくなり、また顔を下に向けた。
私は祖父から、そんなふうに褒められるような人間ではない。祖父に偉そうなことを言っ

て都会で仕事を始めたくせに、たった二年半でその場から逃げ出してしまった。

「つむぎさん」

うつむいてしまった私に、声がかかる。

「大丈夫ですか？　疲れたでしょう？　二階で休んでください。つむぎさんの部屋は、そのままになっています」

ゆっくり顔を上げると、天海さんが私のことを穏やかな表情で見つめていた。

どことなくこの人の雰囲気は、祖父と似ている。温和で親切そうで、それでいて心の奥では強い信念を持っているような、そんな人。

そう思ったら、次第に警戒心が薄れていった。いや、あまりにもいろんなことが起こりすぎて、冷静な判断ができなくなっているのかもしれない。

いまはとにかく、この場から離れることだけを考えた。

「祖父のこと……よろしくお願いします」

まだよく知りもしない天海さんの腕に祖父の骨箱を預けたまま、私は逃げるように彼の前を離れた。

天海さんの言ったとおり、二階にある私の部屋は出て行ったときのままだった。和室の六

畳間に、小学生のころから使っていた勉強机とベッドがある。机の上には昔読んでいた本や漫画、お気に入りだったうさぎのぬいぐるみなどが置かれたままだ。

私は懐かしいぬいぐるみの頭を軽くなでたあと、閉め切っていた窓を少し開けた。目の前に真っ暗な海が見えて、かすかに潮の匂いがする。

肩に掛けていたバッグを下ろし、私はへなへなと畳の上に座り込んだ。そして深く息を吸い込み、それをはく。

祖父が倒れたと電話で聞いてから、病院、叔母の家、通夜に告別式と、わけのわからないまま駆け回り、息つく暇もなかった気がする。

「おじいちゃん……もういないんだ……」

ぽつりと声に出してみても、まだ実感は湧かなかった。ただ体だけがずしりと重く、畳の上に倒れるように横になる。

ぼんやりと見上げた窓の上で、ガラスの風鈴が揺れていた。窓の外から冷たい風が吹きこみ、季節外れの澄んだ音がチリンと耳に響いた。

「わぁ、綺麗な風鈴！」

私がまだ幼いころ、透明なガラスに赤い金魚の絵が描かれた風鈴を、祖父はどこからか

買ってきた。
「どうだい？　気に入ったかい？」
「うん！　おじいちゃん、ありがとう。ねぇ、つむぎの部屋の窓につけて！」
「ああ、いいとも」
祖父はそう答えて、にこにこしながら私の部屋の窓に風鈴をつるしてくれた。
外から海風が吹き込むたび、ガラスの触れ合う綺麗な音が響く。
「ありがとう、おじいちゃん！」
はしゃぐ私に向かって、祖父が穏やかに微笑む。
「では、つむぎ。次は写真を撮ろう。写場へおいで」
「写真？」
「今日はつむぎの、八歳の誕生日だろう？」
誕生日には毎年、スタジオで写真を撮ってくれた祖父。面と向かって言ったことはなかったけれど、私は祖父に写真を撮ってもらうのが好きだった。
「つむぎ、こっちを向いて」
カメラの向こう側で祖父が言う。
明るい照明。三脚の上の大きなカメラ。私に向けられたレンズ。その向こうで微笑む、大

好きな祖父。
私は布張りの椅子にちょこんと座り、ちょっと照れながらも、祖父に向かって笑顔を見せる。
「ああ、とてもいい顔だ」
祖父は必ずそう言って、幸せそうにシャッターを切った。

「つむぎさん」
聞き慣れない声に、驚いて目を開ける。私の視界に天海さんの顔が見えた。
いつの間に眠ってしまったのだろう。窓の外は真っ暗だ。かすかな風が吹いて、ガラスのぶつかる音が響く。
天海さんは窓辺に歩み寄り、少し開いていた窓を閉めた。私の体はすっかり冷え切ってしまっている。
そんな私に、天海さんは言いにくそうに伝えた。
「疲れているところ申し訳ありませんが、ちょっと見てもらいたいものがあるんです。下の部屋に来てもらえますか？」
「……はい」

さっき会ったばかりの人に寝顔を見られてしまった照れくささと、今までの体の疲れが重なって、私はのろのろと畳の上に起き上がる。そういえばまだ、喪服を着たままだった。黒いスカートが、しわくちゃになってしまっている。

「居間で待っています」

天海さんはそう言うと、静かに私の部屋から出て行った。

あの人……住み込みで働いているって言っていたけど、どうしてこんな店で働こうと思ったのだろう。町を出れば、もっといい勤め先はたくさんあるはずなのに。

そんなことを考えながら、私は天海さんのあとを追うように部屋を出て、階段を下った。

一階の店の奥には居間と台所、それと祖父が使っていた部屋がある。二階はスタジオと私の部屋、それに客間がひとつ。もしかしたらその客間で、天海さんは寝泊まりしているのかもしれない。昔、祖父の父がこの店を営んでいたころは、住み込みの従業員さんがいて、その部屋で暮らしていたと聞いたことがある。

私が居間に入ると、低い木製の棚の上に、祖父の骨箱とろうそくや線香、小さな花などが供えられていた。ろうそくには火が灯っており、線香からは細い煙が昇っている。

「これ……天海さんが？」

「すみません。このくらいしか用意できなくて」

「いえっ、十分です。ありがとうございます」

私はその場に正座し、頭を下げた。

「私……なにもしないで、のん気に寝てしまって……」

「いいんですよ。僕のほうこそ、葬儀に参列できず、申し訳ありませんでした」

天海さんも、私と同じように頭を下げる。

「妹尾さんが倒れたとき、ちょうど僕は泊まりがけで実家に帰っていて、亡くなったことは戻ってから近所の方に聞きました。僕がそばにいれば、もっと早く病院に連れていってあげられたかもしれないのに……」

ああ、それで、叔母も店でこの人に会わなかったのか。

「そんなことないです。それを言うなら、私がひとり暮らしなどせず、祖父のそばにいてあげればよかったんです」

私は小さく息をはく。すると天海さんが、紫色の風呂敷に包まれたアルバムほどの大きさのものを差し出し、私の前で静かに開いた。

「これを……つむぎさんに見てほしくて……」

「あ……」

それは、額に入った祖父の写真だった。

『私が死んだら、遺影に使ってほしい』と、妹尾さんから預かっていたんです。葬儀までにお渡しするべきだったんですが、遅くなり、すみませんでした」

私は首を横に振り、天海さんの手から写真を受け取る。

祖父は人の写真を撮るばかりで、自分が撮られることは嫌がった。だからいままでこの家に、祖父の写真は一枚もなかった。葬儀のときに使った遺影は、叔母が持っていた私の両親の結婚式の集合写真から、祖父の顔をなんとか加工してもらったものだった。

それなのに……この一枚には、まったく嫌がる素振りも見せない、穏やかでやさしい表情の祖父が自然に写し出されている。

「すごく……いい写真ですね」

私の言葉に、天海さんの顔つきが一瞬だけ揺れ動く。

「こんなもの、いつ用意したんでしょう……祖父は自分が死ぬことを、予感していたんでしょうか……」

いや、持病もなかった祖父が、そんなことを考えていたとは思えない。

「……どうでしょうか。最近は元気なうちから、遺影を撮影する方もいらっしゃいますから」

天海さんが答えた。

私はじっと写真の中の祖父を見つめたあと、それを骨箱の隣に置く。そして両手を合わせ、そっと目を閉じる。

「天海さん」

目を開けると、私は座ったまま彼のほうに体を向けた。

「他になにか言っていませんでしたか？　あの……私のこととか……」

「つむぎさんのことですか？」

「はい。私、祖父にひどいことを言って、家を出たきりだったから」

二年半前、この家を出て行く日。祖父は写真館の前に立ち、黙って私の姿を見送っていた。私はそんな祖父に声をかけることも、手を振ることもなかった。今思えば、意地になっていたのかもしれない。そして生きている祖父の姿を見たのは、それが最後だった。

「いえ、大事なお孫さんだという以外はなにも」

「……そうですか」

私は小さく息をはき、自分の前髪をくしゃっと握ると、ふっと笑って言った。

「私……こんなことになるとは思ってなくて。いえ、今さら後悔してもどうにもならないってわかっているんですけど。いや、そもそも私、後悔しているのかな……」

それさえもわからない。

「私、祖父に写真を撮ってもらうのが好きだったんです。祖父が誰かの写真を撮っている姿も、カッコよくて好きでした。だからずっとこの店を続けてほしかった」

こんな話をするつもりはなかったのに。私は張りつめていた糸がぷつんと切れたかのように、言葉を一気にはき出した。

「でもこのままじゃ駄目だとも思って。こんな昔と変わらないやり方じゃ、お客さんが来なくなってしまうって、すごく焦って……もっと今の時代に合うお店にしたほうがいいと、私、何度も祖父に忠告したんです」

まくしたてるような私の声を、天海さんはじっと聞いてくれている。

「だけど祖父はわかってくれませんでした。この店を変えるつもりはないと、頑なに拒んで……私はそんな祖父に言ってしまったんです。『もうおじいちゃんなんか知らない。こんな店、いますぐ潰れちゃえばいい』って」

私は天海さんから目をそらし、小さく笑う。背中に、嫌な汗がにじんでいる。

「それ以来、店のことに口出しはしませんでした。祖父もなにも言わなくなって……そのあと私は東京のこども写真館に就職し、この家を出て行きました」

どうして私は、こんな話をしているのだろう。今日はじめて会ったこの人に、同情してもらいたいのだろうか。それとも叱ってほしいのだろうか。

どちらにしても、もう手遅れだ。

「つむぎさんは……」

ずっと黙っていた天海さんが、ぽつりとつぶやいた。

「もう一度、おじいさんに会いたいと思いますか？」

私はふっと笑って、天海さんに言う。

「その質問、意味ありますか？　会いたいと思っても、会えるはずはないのに」

「いえ。つむぎさんが会いたいと思うのなら、会う方法はあります」

意味がわからず、中途半端に口を開けたまま天海さんを見る。

「会う方法はありますよ」

「なにを……言っているんですか？」

自分の声がうわずっている。天海さんは座ったまま、すっと背筋を伸ばして私に言った。

「もしつむぎさんがおじいさんに会いたいのなら、今夜十一時五十五分、二階の写場へ来てください。ただしおじいさんに会えるのはたった一度、今日と明日の境目の、十分間だけです」

呆然としている私の前で、天海さんはほんの少し口元をゆるめると、音もなく立ち上がり

店のほうへ行ってしまった。
「なんなの？　あの人」
十分間だけ祖父に会える？　そんなバカなことがあるものか。
祖父は亡くなったのだ。もう二度と会うことはできない。

お線香をあげたあと、私は二階の部屋に戻った。そしてベッドの上に、倒れ込むように横たわる。
『もう一度、おじいさんに会いたいと思いますか？』
会えるわけない。そんなことは絶対にありえない。今日、祖父の体は焼かれてしまった。遺骨だってこの目で見た。会えるわけはないのだ。
頭の中で繰り返しながら、私はごろんと寝返りをうつ。
だけどもしも本当に、もう一度だけ祖父に会えるなら――私はなにを、伝えたいのだろう。
ベッドの脇にある本棚に、見覚えのあるカタログが置いてあった。何気（なにげ）なくそれを手にとり、パラパラとめくる。そこにはパステルカラーのドレスや着物を着た女の子が、カラフルな背景や小物と一緒に、にこやかに微笑む写真が並んでいた。
私が働いていた、こども写真館のカタログだ。

かわいらしい衣装を何着も着られて、何ポーズでも撮影してくれるというのが、このお店の売り文句だ。デジタルカメラが普及した今では、このような大型店は多い。お客さんは何枚も撮った写真を、すぐに大きなモニター画面で確認しながら、気に入ったものを選んで購入することができるのだ。
私はこのお店のカタログを、何度も祖父に見せた。祖父の店をここまでの規模にするつもりはないが、今はこのようなやり方もあるのだという現実を、知ってほしかったのだ。
けれど祖父はこう言った。何度もシャッターを切れることも、すぐに撮った写真を見られることも、どれも素晴らしいことだけど、自分は昔ながらのやり方を変えるつもりはないと。
写真は撮る人から、撮られる人への、大切な贈り物。だから心を込めてたった一枚、最高の瞬間をカメラで撮り、受け取る人の顔を思い浮かべながら、丁寧に現像し印画紙に焼きつける。その一連の作業が、おじいちゃんは好きなのだと。
「おじいちゃんの気持ちもわかるけど、そんな理想だけじゃもうやっていけないんだよ。今どきデジタルカメラもパソコンも使わない写真屋なんて、見向きもされなくなるってば」
「そのときはそのときで仕方ないね。おじいちゃんは最後まで、この妹尾写真館の写真師でいたいんだよ」
そんなの勝手だと思った。祖父はそれで満足かもしれないが、私は納得できない。

両親を亡くしてからずっと、祖父には世話になってきた。
祖父は、私が母を恋しがらないように、毎日食事を手作りし、身の回りの世話をしてくれた。自分は本当に質素なものしか口にせず、服も何年も同じものを着まわして。それでも祖父はいつも笑顔で、父の代わりに仕事をし、私を大学まで通わせてくれた。
私が生まれてからの祖父の人生は、すべて私のためだけに注がれていたのだ。
だから少しでも、私は祖父に楽をしてもらいたかった。もっと商売が繁盛する方法があるのではないかと、私なりにいろいろ考えた。
まだこの店を潰したくはない。
祖父と一緒にこの小さな店に立ち、ひとりでも多くの人の思い出を残してあげるのが、私の夢だったのだ。
それなのに――
「もうおじいちゃんなんか知らない！　こんな店、いますぐ潰れちゃえばいい！」

チリン。
耳に風鈴の音が響いた。私ははっとして目を開く。
またいつの間にか、眠っていたのだ。

窓辺を見ると、窓は閉まったままである。それなのにいま、透き通った音が聞こえた気がした。
私はベッドの上に体を起こし、スマートフォンの画面を見る。表示は午後十一時五十分。あと五分で、天海さんが指定した時刻になる。
『もしつむぎさんがおじいさんに会いたいのなら、今夜十一時五十五分、二階の写場へ来てください』
天海さんは、真剣な表情でそう言った。冗談を言っているようには見えなかった。
「でも、まさか……」
私はふるふると首を横に振る。
ありえない。そんなことは、ありえない。私がもう一度、おじいちゃんに会えるなんて。
そんな思考とは裏腹に、私はふらりと立ち上がった。部屋を出て、薄暗い廊下を進む。
スタジオへは店の階段だけでなく、自宅側からも入れるようになっている。私はドアの前で立ち止まり、深く息をはいた。
閉じられたドアに近づき耳を澄ましてみる。しかしなんの音も聞こえない。私は震える手でドアノブをつかむと、思い切ってそれを引いた。

「お待ちしていました、妹尾つむぎさん」
やわらかな声が聞こえる。けれどスタジオの中は薄暗く、声の主はぼんやりとしか見えない。
「天海……さん？」
薄闇の中で目を凝らす。昔から祖父が使っていた、カメラと三脚があるのがわかる。そのそばに立っているのは、黒いスーツ姿の天海さんだ。
『おじいちゃんは最後まで、この妹尾写真館の写真師でいたいんだ』
祖父が仕事をしていたときの姿と、目の前の彼の姿が自然と重なる。
「つむぎさん。どうぞ奥へお進みください」
戸惑いながらも、天海さんに言われたとおりの方向へ足を動かす。
一番奥の壁にはスクリーンが掛けられていて、その前にアンティークな布張りの椅子が置いてあった。
私が椅子の近くで立ち止まると、天海さんが言った。
「こちらの席に、つむぎさんの『会いたい人』を呼んでいただきます」
「私の……会いたい人……」
「そうです。つむぎさん自身が呼ぶんです」

「私が……呼ぶ？」
「椅子に手をかけて、会いたい人のことを想ってください」
私は半信半疑のまま、椅子の背に手をのせた。懐かしい感触に、昔の思い出がよみがえる。
誕生日には、この椅子に座って写真を撮った。ひとつ年齢が上がったことが、ちょっと照れくさくて、ちょっと誇らしかった。顔を上げるといつもカメラの向こうから、祖父がやさしく私を見守ってくれていた。
「それでは照明をつけます」
次の瞬間、パッと明るい光に包まれた。撮影用のライトがついたのだ。その眩しさに一瞬目を閉じ、再びゆっくりとまぶたを開く。
「えっ……」
目の前にある椅子に座っているのは――
「おじいちゃん！」
私は思わず声を上げた。祖父はにこにこと微笑んで、私の顔を見上げている。
「おじいちゃん……本当におじいちゃんなの？」
「そうだよ、つむぎ。会いたいと思ってくれて、ありがとう」
会いたいと……私が思ったの？

おそるおそる、指先で祖父の顔に触れてみる。その頬には体温があった。葬儀のときに触れた、あの冷たい感触ではなかった。私は両方の手のひらを広げ、祖父の頬を包み込む。

「おじいちゃん……」

震える私の手に、祖父の手がそっと重なる。

祖父の手にも体温がある。温かい。

「つむぎさん」

そっと目を閉じた私の耳に、天海さんの声が聞こえた。

「もうじき日付が変わります。おじいさんに伝えたいことがあるのなら、伝えたほうがいいですよ」

私は天海さんから聞いた言葉を思い出す。今日と明日の境目の十分間しか、祖父には会えないと言っていた。

でも私は、祖父に伝えたいことがわからない。いや、ちがう。伝えたいことがありすぎて、なにから伝えたらいいのかわからないのだ。

戸惑う間にも、時間は過ぎる。

「つむぎ、大人になったね」

すると、無言になってしまった私に、祖父のやわらかい声がかかった。

「つむぎがいなくなってから、もっとつむぎの意見も受け入れるべきだったと、反省していたんだよ。頑固なおじいちゃんで悪かったね。本当は一度でいいから、大人になったつむぎと一緒に、あの店に立ちたかった。あの店に立って、お客様を迎えたかった」

私ははっと顔を上げる。そのとき壁に掛かった柱時計が、ぼーんっと音を立てはじめた。ひとつ、ふたつ……十二の音が時を知らせる。

祖父はやさしく微笑むと、温かい手のひらで私の髪をそっとなでた。幼いころ、私が泣いたとき、いつもしてくれたように。

「おじいちゃん……そんなこと思ってくれていたの？」

「いつかつむぎが戻ってきたら、伝えたいと思っていたんだ。それなのに……許しておくれ、つむぎ」

「ちがうっ、ちがうよ！」

私は声を張り上げる。

「許してもらうのは私のほうだよ、おじいちゃん！」

ずっと言えなかった。いつでもここに、祖父がいると思っていたから。けれど些細（ささい）なすれ違いが、取り返しのつかないことになってしまった。

「おじいちゃん、私っ、おじいちゃんに写真を撮ってもらうのが好きだったの。おじいちゃ

んが誰かの写真を撮っているところも、すごく好きだった」

祖父はにこやかな顔で、何度もうなずく。胸がじんわりと熱くなる。

「それにおじいちゃんが、このお店を愛していることも知っていたよ。本当は私もおじいちゃんと一緒に、妹尾写真館に立つのが夢だったの。それなのに『潰れちゃえばいい』なんて言ってしまって……ごめんなさい」

祖父が静かに首を横に振る。

「ありがとう、つむぎ。その言葉が聞けただけで、おじいちゃんは幸せだよ」

私ははっと息を呑んだ。目の前の祖父の姿が、うっすらと透けている。と思えば、また元に戻り、再び薄くなる。この世とあの世の境目を、ふらふらとさまよっているかのように。

時間がない。他にもたくさん言いたいことがあったはず。どうしてもっと早く、祖父に伝えなかったのだろう。

「おじいちゃんっ、私っ……」

「そろそろ時間です」

私の言葉を断ち切るように、天海さんの声が無情に響いた。そして一瞬、彼は祖父の顔を見つめる。祖父は穏やかな表情で天海さんを見て、「任せたよ」とつぶやいた。

「つむぎさん、おじいさんの隣に立ってください」

「え？」

「最後に、最高のお写真をお撮りします」

「写真を……撮るの？」

「そうですよ。さ、早く」

天海さんに促され、私は椅子に座る祖父の隣に立った。消えゆく祖父の姿に、悲しみが押し寄せる。そんな私の手を、祖父がそっと握りしめた。

「おふたりとも、こちらを向いてください」

天海さんがカメラの向こうで言う。レンズを見つめた私の耳に、祖父の声が聞こえる。

「人が死んでも、写真は残る。写真は撮る人から、撮られる人への、大切な贈り物なんだよ。どうかそれを忘れないで」

胸の奥から熱いものが込み上げて、どうしようもなく溢れ出る。

「それでは撮ります」

私は祖父の手を、ぎゅっと握りしめた。

祖父の写真への熱い想いを。この写真館への愛情を。そしてつないだ手のぬくもりを――

私は一生忘れない。

「ああ、おふたりとも、とてもいいお顔です」

その瞬間、目の前でフラッシュが眩しく光り、シャッターが一度だけ切られる。
気づくと隣に祖父の姿はなく、私の手には祖父のぬくもりだけが残っていた。

「つむぎさん。つむぎさん」
私の名前を呼ぶ声で目が覚めた。布団の中から顔を出すと、天海さんが私の顔をのぞき込んでいる。私は恥ずかしくなって、咄嗟に布団で顔を隠した。
「おはようございます。起きたら下に来てください。暗室にいます」
「えっ、あ……暗室？」
寝起きで戸惑う私に向かって、天海さんは小さく笑いかけ部屋を出て行く。
私はその背中を見送りながら、ぼんやりと真夜中の出来事を思い出した。
写場にいた祖父。一緒に並んで写真を撮った。握り合った手のぬくもり……
「あれは……」
じっと自分の手を見つめたあと、くしゃくしゃと寝癖のついた頭をかく。
いや、そんなことがあるはずはない。天海さんが妙な話をするから、きっと祖父に会った夢を見たのだ。そうだ、夢に決まっている。
私はベッドから起き上がり、窓を開く。目の前には朝の凪いだ海が広がっていて、ガラス

の風鈴がかすかな音を立てた。
押入れの中から引っ張り出したセーターをかぶり、ジーンズを穿いて下の部屋に下りる。
昨日は喪服のまま眠ってしまったようだ。自分で思っていた以上に、私は疲れていたらしい。
「天海さん？」
居間に天海さんはいなかった。祖父の遺影の前で、線香から細い煙が上がっている。天海さんがあげてくれたのだろう。私も線香に火をつけ、手を合わせる。
『人が死んでも、写真は残る。写真は撮る人から、撮られる人への、大切な贈り物なんだよ』
祖父の声が聞こえた気がして、目を開ける。夢の中で、祖父が言っていた言葉だ。私は祖父の遺影を見つめる。
祖父はこの写真を、誰に撮ってもらったのだろう。人に撮られるのを嫌がる祖父のことだ。セルフタイマーを使用して撮ったのかもしれないが、ひとりでカメラに向かって、こんなに自然な表情を出せるとは思えない。
写真嫌いの祖父がひとりで写った、たった一枚の写真。いざというとき私が困らないように、遺影だけは用意しておいたというのか。

私は静かに立ち上がり、天海さんの姿を捜した。
そういえば、暗室にいるとか言っていたな……天海さんに夢の話をしたらどんな反応をするか、ちょっと興味があった。
私は居間を出て、お店の隅にある小さな暗室に向かった。

この部屋に入るのは、ずいぶん久しぶりだ。幼いころはよく祖父のあとを追って、暗室の中に入っていた。祖父のそばで、祖父の仕事を見ているのが好きだった。
「天海さん？　入りますよ」
扉の中でさらに仕切られたカーテンを抜けると、暗い部屋に赤い灯りがぼんやりと灯っていた。懐かしい薬品の匂いに、タイムスリップしたような気持ちになる。
「ああ、つむぎさん、いらっしゃい。よく眠れましたか？」
中にいた天海さんがそう言った。私はついおかしくなって、暗闇の中でふふっと笑う。
ここは私の家なのに、なんだか私のほうがお客さんのようだ。いや、二年間も住み込みで働いていたならば、今では天海さんのほうがこの家の住人にふさわしい。
暗室で作業している姿だって、祖父に負けず、なかなかサマになっている。
「いえ、なんだかヘンな夢を見てしまって……」

「ヘンな夢？」
「はい。祖父に会って、天海さんに写真を撮ってもらう夢でした」
天海さんが私を見て、小さく笑う。
「つむぎさん」
「はい？」
「これをよく見てください」
天海さんが印画紙を一枚、薬品の中に浸す。ピンセットで挟んで揺らしていると、次第にうっすらとした像が浮かび上がってくる。昔よく、祖父がやっていたのを思い出す。
「妹尾さんはよく言っていました。こうやって写真が写し出されてくる瞬間が、一番緊張して、それでいて一番楽しみなんだと」
私は黙って天海さんの声を聞く。
「美しい写真が撮れているだろうか。写真の中の人物はどんな表情をしているだろうか。できあがった写真を渡したら、どれほど喜んでくれるだろうか。いろんなことを想像して、一番どきどきするそうです」
わかる。その気持ちは、なんとなく。
撮ったその場で画像を確認でき、失敗したら一瞬で消去し、何枚でも撮り直せるデジタル

カメラでは、この気持ちを味わうことはできない。
「ほら、見てください」
私は液に浸された印画紙を見た。
「えっ」
そこに写し出されたのは、椅子に座った人物と、その隣に寄り添うように立つもうひとりの人物。
「つむぎさん。あれは夢ではないですよ。僕はこのとおり、おふたりを写真に撮らせていただきました」
「え、そんなの……嘘……」
「嘘ではありません。この写真は、僕からつむぎさんへのプレゼントです」
狭くて薄暗い部屋の中、私はただ呆然とその声を聞いていた。

天海さんが焼いてくれた写真は、祖父の好きなモノクロ写真だった。
被写体となる人物の、人生までを写し出すような深みのあるモノクロ写真を、祖父はとても愛していた。
できあがった写真を額に入れて、天海さんは私の部屋まで持ってきてくれた。

「本当に……こんなことって……」
「あるんですよ」
天海さんが私の前で微笑む。私はもらった写真を見つめ、そっと指先でなでてみる。
信じられないけれど、この写真がたしかな証拠だ。私は亡くなった祖父と会い、一緒に写真を撮ったのだ。
そしてこれは祖父と私が一緒に写った、最初で最後の記念写真となった。
祖父はいつものやさしい笑顔で写っており、喪服姿の私は半分泣き顔で、それでも必死に笑顔を作ろうとしている。
「ヘンな顔していますね、私」
写真を見ていたら、つい言葉が漏れた。
「そんなことないです。とってもいいお顔ですよ」
天海さんはそう言うけれど、どうせならもっとまともな笑顔で撮ってもらえばよかった。
「それはつむぎさんの、一番素直な表情だからです」
「え？」
私は天海さんを見上げた。
「いままで泣けなかったのに、そのときやっと泣けたでしょう？　おじいさんに会えて、よ

かったですね」

私の一番素直だという表情を、この人はたった一枚の写真に収めた。

胸がじんわりと熱くなって、そのあと急に罪悪感が押し寄せてきた。

「天海さん、私……仕事を辞めてしまったんです」

天海さんは黙って、私を見ている。

「祖父のやり方に反発して、まったく違うやり方をしている会社に入りました。最初はキラキラしたスタジオや衣装で、たくさんの子どもたちを撮影できて満足だったんですけど、マニュアル通りの流れ作業のようなその仕事に、だんだん疑問を持つようになってしまって……決まりきったポーズや作られた笑顔だけではなく、もっとひとりひとりと向き合って、その子にしか出せない表情を撮ってみたいと思いました」

握りしめた手に、じわりと嫌な汗がにじむ。

「それを先輩に伝えてみたら、生意気だと言われました。マニュアル通りのなにが悪い、この仕事を馬鹿にしているのかと、相手を怒らせてしまったんです。たしかにそうですよね。わかっていて入社したくせに、二年やそこら働いただけで会社のやり方に口出しするなんて。私はそこにいづらくなり、退職してしまいました」

一旦言葉を切って、深く息をはく。

「結局私はいつも口だけなんです。なんの実力も経験もないのに、批判だけして相手を傷つけてしまう」

「でもつむぎさんは、今回ひとつ経験を積みました」

天海さんの声が聞こえた。

「そうやっていろいろなやり方を経験してみればいいんです。そのうちきっと、撮る人と撮られる人の心が通じ合う一枚を、つむぎさんもつくり上げることができると思います」

ゆっくりと顔を上げた私に、天海さんが照れくさそうに笑いかける。

「すみません、僕も生意気なことを言いました」

「いえ、そんなことないです」

なんだか自然と頬がゆるむ。

どうしてだろう。どうして会ったばかりのこの人に、私はこんなに心を開いてしまっているのだろう。

そんなことを考えていた私に、天海さんが言った。

「つむぎさんは、妹尾さんにそっくりですね」

「え？」

「妹尾さんの写真に対する強い信念が、つむぎさんの中にも自然と刷り込まれているんで

しょう。だから写真のことになると、つむぎさんもつい熱くなってしまうんです。でも僕は、妹尾さんのような人を祖父に持つつむぎさんが、すごく羨ましいです」

私は急に恥ずかしくなった。そんなつもりはなかったけれど、もしかしたらそうなのかもしれない。

「でも私……祖父に、一番大事なことを伝えられませんでした」

そっと天海さんから目をそらし、私は写真の中の祖父を見つめた。

「おじいちゃん、ありがとう。大好きだったよって……一番大事なことが言えませんでした」

本当は、祖父が生きているうちに言うべきだった。

だけどもう、祖父には会えない。あの不思議な出来事は、もう二度と起こらない。

「大丈夫。おじいさんはちゃんとわかっています。つむぎさんの気持ちを」

私はもう一度、ガラスの上から祖父の姿をそっとなでる。

「そうでしょうか……」

「そうですよ。だっておじいさんはつむぎさんに会えて、こんなに素敵な笑顔をしているでしょう?」

ぽたりと涙が、祖父の顔の上に落ちた。私はぐすっと鼻をすすって、目から溢れる涙を、

指先で必死に拭う。

「人が亡くなっても、写真は残ります。大切な人との思い出を、いつまでも大事にしてあげてください」

私は祖父との写真を胸に抱いて、静かにうなずいた。

「僕も最後に、妹尾さんの笑顔が見られてよかったです」

ひとり言のような天海さんの声に、季節外れの風鈴がチリンと美しい音を重ねた。

第二章

最後の笑顔

SENOO PHOTO STUDIO

Minase Sara Presents

祖父の葬儀が終わり、三日が経った。私は祖父の部屋の遺品を整理しながら、この家に泊まっている。

都内のアパートは契約したままだ。転職先を探さなければと思っていた矢先に、祖父が亡くなってしまった。

仕事も、たったひとりの家族も失い、私は途方に暮れていた。唯一相談相手になってくれそうな叔母は仕事が忙しいらしく、電話で一度話しただけで葬儀の日以来会っていない。

「はぁ……」

誰もいないのをいいことに、ため息を声に出す。そしてさっきこの部屋で見つけた祖父のノートを、膝の上でぱらぱらとめくってみる。

そこには祖父にもしものことがあったとき、私がなにをすればいいのかが事細かにボールペンで書き込まれていた。ひとり残されてしまう孫娘が慌てないように、するべき事務手続きや連絡先をノートにまとめてあったのだ。

それにしても祖父は、いつからこんなものを作成していたのだろう。遺影を用意していたこともそうだが、几帳面で真面目な祖父らしいとつくづく思った。

ところがそのノートには、一番肝心なことが書いていなかった。『この店をどうするか』について、なにも書かれていないのだ。ここまで事細かに書いているのに、どうして店のことには触れていないのだろう。

「私が決めろっていうの？」

勝手にそんなことはできない。この『妹尾写真館』は、祖父のものだ。

私はまた小さく息をはき、ノートを閉じると、そばにあった古いアルバムを手にとった。これもノートと同じく、祖父の部屋で見つけたのだ。

明るい日差しの差し込む畳の上で、私は赤い布張りの表紙を開いた。モノクロ写真に写っているのは、若いころの祖母だった。

祖母は私が生まれる前に亡くなってしまったので、会ったことはない。でも祖父からはよく「おばあちゃんは、この町一番の美人さんだった」と聞かされていた。

「うん、たしかに」

パーマをかけ柄物のワンピースを着た、ハイカラな雰囲気の美人さんが、『妹尾写真館』の前に立っている。

この写真を撮ったのは、祖父だろう。カメラのレンズを見つめる祖母は、とても幸せそうに微笑んでいた。

「つむぎさん」

突然声をかけられ、はっとする。襖（ふすま）が静かに開き、天海さんが顔を出す。

「ちょっと店番を頼んでもいいですか？」

「あ、はい」

「僕はお昼の支度をしますので」

壁に掛けられた時計の針を見ると、十二時を回っている。私は祖父の部屋を出て、店に向かった。

天海さんは、謎の人だ。

祖父がいなくなっても、毎日定刻に店を開け店番をし、その合間に三食食事を作ってくれる。

祖父はなにを思って、この人を雇ったのか。いくら年老いていても、店の仕事は祖父ひとりで十分できたはずだ。まさか家政婦代わりに雇ったわけではないだろう。祖父は家事全般なんでもできたから、そんなのはありえない。

それにしてもこんな得体のしれない人と、ひとつ屋根の下で寝起きして、お膳を囲んでいる私もどうかしている。

天海さんは本当に、二年前から従業員だったのか？　もしかしたら祖父の店を乗っ取ろうと企てている、悪い人だという可能性はないだろうか？　そんなドラマみたいな展開を考えてもみたけれど、こんな田舎町のいまにも潰れそうな写真館を、欲しがる理由が見つからない。

「こんにちはぁ！」

カウンターの後ろの椅子に座って、そんなことを頭の中で考えていたら、かわいらしい声が耳に聞こえた。

「こんにちはぁ！」

「は、はいっ、いらっしゃいませ！」

慌てて立ち上がってみるものの、目の前に人影はない。

「あれ？」

首をかしげていると、カウンターの下からひょっこりと小さな女の子が顔を出した。

「『せのおしゃしんかん』って、ここですか？」

「あ、はい。そうです」

答えた私の前で、女の子がにっこりと笑う。

小学校低学年くらいだろうか。肩上で綺麗に切り揃えられているボブヘア。前髪は星やハートがついたカラフルなピンをいくつも使って留めている。ピンク色のリュックを背負って、首からは猫の顔のポシェットをぶら下げていた。

「パパが教えてくれたの。ここに行くと、死んじゃった人と写真が撮れるみたいだよって」

「えっ」

思いもよらない言葉に、私の心臓がどきっとする。

女の子はポシェットの中から紙切れを取り出し、ちょっと背伸びをしてカウンターの上に置いた。

『帰らぬ人との最後の一枚、お撮りします。妹尾写真館』

私は差し出された紙を見る。それは、小さな小さな文字だけの新聞広告を切り抜いたものだった。住所と電話番号も書いてあり、たしかにこれはうちの店だ。けれどこんな広告、今まで見たことも聞いたこともない。

「ここで死んじゃった人に、会えますか？」

「あ……えっと……」

つぶらな瞳をキラキラとさせながら、あまりにも明るい表情で聞いてくるので、私は答え

に詰まってしまった。
「会えますよ」
そんな私の後ろから声がかかる。振り向くと、天海さんがそこに立っていた。私は広告を手にして、天海さんに詰め寄る。
「これ……どういうことなのか、説明してもらえますか？」
天海さんはほんの少し、口元をゆるめる。
「この広告は僕が出しました。内容が事実かどうかは、つむぎさんだってよくご存知ですよね」
私の頭に、真夜中の出来事が思い出される。私はあの夜、たしかにこの店の二階で祖父に会った。あれは夢でも幻でもない。祖父の温かいぬくもりだって覚えている。そして天海さんに、祖父との最後の一枚を撮ってもらったのだ。
「広告を出す前は、妹尾さんがひっそりと口コミだけであの仕事をしていました」
「おじいちゃんが？　私なんにも知らなかった……」
「妹尾さんは、つむぎさんには隠していたんです。つむぎさんはこの妹尾写真館の後継者ですけど、まだ子どもでしたから。代々受け継がれてきたこの仕事は、大人になるまでは伝えてはいけないことになっていたらしいです。でも大事なことを伝える前に、妹尾さんは逝っ

てしまった」
「え……」
私が妹尾写真館の後継者？　代々受け継がれてきた仕事？
戸惑う私の前で女の子が首をかしげる。
「あのぅ……」
すると私の後ろにいた天海さんがカウンターの向こう側へ回り、女の子の前にしゃがみ込んだ。
「ずいぶんかわいいお客さんですね。ひとりで来たんですか？」
「うん！　パパに連れてってって頼んだんだけど、こんなの嘘に決まってるって。だから陽葵（ひまり）、パパの机の引き出しからこの紙借りて、ひとりでバスに乗って来たの」
「ひとりでバスに？」
「陽葵、ひとりでバス乗れるよ！　二年生だもん」
陽葵ちゃんという子はまた猫顔のポシェットを開き、ＩＣカードを取り出して私たちに見せてくれた。
「そうか。偉いんですね」
「ママがいなくても、陽葵なんでもできるもん」

にこにこしている陽葵ちゃんに、私は聞いてみた。
「陽葵ちゃんは……誰に会いたいのかな？」
私の声に、陽葵ちゃんは元気に答える。
「ママ！　死んじゃったママに会いたい！」
私の胸がちくんと痛む。
だけどここでならママに会える。この小さな女の子の願いを、叶えてあげることができるのだ。
天海さんはいつもと同じ穏やかな表情で、陽葵ちゃんにゆっくりと伝える。
「大丈夫です。ここでママに会えますよ。ただしママに会えるのはたった一度。今日の夜の十分間だけです」
「はい！」
元気に手を上げる陽葵ちゃんは、いったいどこまで理解しているのだろう。
「でも夜までここにいたら、きっとパパが心配します。だからまずはパパに連絡してみましょう。パパの電話番号はわかりますか？」
そこではじめて、陽葵ちゃんが顔をしかめた。
「わかるけど……きっとパパに怒られる……」

陽葵ちゃんはもう一度ポシェットを開き、中からピンク色の携帯電話を取り出した。
「これでパパに電話かけられるよ」
「ではパパに電話してもらえますか？」
「でもパパは……そんなの嘘だって言うから……」
天海さんの前で、陽葵ちゃんはもじもじしている。そんな陽葵ちゃんを見ていたら、いてもたってもいられなくなった。
「じゃあパパが出たら代わってくれる？　お姉さんからパパにお話ししてみるよ」
「うん……わかった」
陽葵ちゃんがしぶしぶうなずいて、電話をかけはじめた。
電話に出た陽葵ちゃんのお父さんは、ここから一時間以上も離れた会社で仕事中だった。突然の連絡に状況がつかめず、ちょっと困惑しているようだ。
「妹尾写真館さん？　陽葵がひとりでそちらへ行ったんですか？」
「はい。バスに乗ってきたそうです。パパの引き出しの中にあった新聞広告を持って」
「私の引き出し？　あっ、妹尾写真館って、あの広告の？」
お父さんが声を上げる。

「たしかに広告の話は娘にしました。ちょっと噂に聞いたこともあったので。でもまさか、冗談ですよね？　帰らぬ人と写真が撮れるなんて」
「冗談ではありません。本当に撮れるんです」
　一瞬の間があいたあと、お父さんは電話の向こうで笑い出した。
「本気で言っているんですか？　そんな馬鹿なことはありえません。申し訳ありませんが夕方まで仕事を抜けられなくて……終わり次第すぐ迎えに行きますので、それまで娘を待たせてもらえますか？」
「それはかまいませんけど、陽葵ちゃんは今夜、本当にママに……」
「すみません。よろしくお願いします」
　そう言って、さっさと電話を切ってしまったお父さんは、まったく信じていないようだった。たしかにその気持ちもわかる。私だって実際祖父に会うまでは、信じられなかった。
　でも信じていないならどうして、この広告を捨てずに取っておいたのだろう。
「お姉ちゃん……パパ怒ってた？」
　居間で、天海さんからもらったジュースを飲んでいた陽葵ちゃんが、心配そうに聞いてくる。
「あ、ううん。お仕事終わったら、ここに来てくれるって言ってたよ」

「陽葵、まだ帰らないよ！　ママに会うまで帰らないからね！」
　そう言って陽葵ちゃんは、そばにいた天海さんの後ろに隠れてしまった。
「大丈夫ですよ。パパが来たら、僕からも話してみます」
「そうそう、心配しないで、陽葵ちゃん。パパが来るまでお姉ちゃんと遊んでいよう？　あ、お腹すいたんじゃない？　一緒にお昼ご飯食べようか？」
　その言葉に天海さんが立ち上がる。
「いま昼食を用意しますので、ちょっと待っていてください」
　天海さんは陽葵ちゃんの頭を軽くなでたあと、台所へ行ってしまった。残された陽葵ちゃんは、口をとがらせて不満そうな顔をしていた。

　しばらくすると天海さんが、オムライスをお皿にのせて戻ってきた。
「わぁ、猫ちゃんだ！」
　陽葵ちゃんがぱあっと笑顔になり、お皿をのぞき込む。陽葵ちゃんの前に置かれたオムライスは、黄色い卵が猫の顔の形になっていて、ケチャップで目や鼻やひげが描かれていた。
　天海さん……こんなこともできるのか。すごすぎる。
　この三日間、私は毎日三食、天海さんの作ってくれた料理を食べている。

食事は私が作りますと言ったのだけど、「それよりつむぎさんは、妹尾さんの部屋の片づけを頼みます」と台所に立たせてもらえない。

でも天海さんは私よりよっぽど手際よく、おいしい料理を作ってくれから、私はひそかに食事の時間を楽しみにしていた。

「これは陽葵ちゃんの分です。いっぱい食べてください」

「かわいい！　よかったね、陽葵ちゃん」

「うん！」

スプーンを持った陽葵ちゃんがにっこりと笑う。やっぱりこの子は、向日葵（ひまわり）のような明るい笑顔がよく似合う。

「いただきまぁす！」

陽葵ちゃんが大きな口を開けて、オムライスを食べはじめた。

「おいしい！」

「よかったです」

口元にケチャップをつけて笑う陽葵ちゃんの前で、天海さんはやさしく微笑んだ。

お昼ご飯を食べて片づけを終えると、天海さんはお店に向かった。猫ちゃんオムライスで

立ち読みサンプル
はここまで

気に入られたのか、陽葵ちゃんも天海さんのあとをついていく。

「お兄さん、なにしてるのー？」

「カメラにフィルムを入れているんです」

陽葵ちゃんは背伸びをして、カメラのあるカウンターの上をのぞいている。私も陽葵ちゃんの後ろに立つ。

「フィルムってなぁに？」

デジカメやスマホでしか写真を撮ったことのない子どもたちは、フィルムカメラを知らない。私の年代の友達だって、ほとんど知らないだろう。

「カメラに入れてシャッターを押すと、フィルムに画像が記録されるんです」

「ふうん？」

首をかしげる陽葵ちゃんを見て、天海さんが笑う。

「このカメラで、写真を撮ってみますか？」

「えっ、いいの？」

「これで陽葵ちゃんの好きなものを、撮ってみてください」

天海さんはそう言うと、カメラを持って陽葵ちゃんの前に来た。そして陽葵ちゃんの首に、カメラのストラップをかけてあげる。